人形淨るりの新作に可能性なし

大阪朝日新聞の七月十四日(昭和四年)、サンデー・セクションを見ると、木谷蓬吟氏の「新文樂座へいろいろ注文帖」といふ一文がある。そしてその注文を五項目に分つてゐる。

一、新作物の上演
二、近松物の復活
三、後進の養成
四、人才の拔擢
五、門戸開放

と。この木谷氏の意見に就いて、私は異つた見方を年來懷いてゐるので、私の觀るところを、こゝに披瀝したい。第一にこの三、四、五の三項目は、要するに一項目に包括さるべき性質で、現在の文樂の採りつゝある諸情弊を打破して、藝人社會、所謂「顔」を無視することが人才の拔擢となるのである。文樂座の內外を問はない、これは木谷氏の說くところ尤もである。又文樂座の內部においても、この事項に、

對して誰一人の反對がない。が、その效果が擧がらないといふばかりだ。例へばこの兩三年において、竹本朝太夫を入座せしめ、竹本貴鳳太夫を「化物」として玄人の太夫とならしめた。又文樂座に長い間弓を引いてゐた友松の道八をも重用してゐる。現在の文樂座は既に門戸開放を行つてゐるのである。問題は野に遺賢がないのである。「化物」の輩出は、門戸の開放によつて行はれるものでない。一例が右の貴鳳太夫の如き「化け損ね物」が出て、さらでだに場割に困つてゐる文樂座を一層困らしてゐるのがその現狀である。この木谷氏の三項目は、お說はご尤もであるが、實情に凱切なるものがない。根本の改良案はそんなところにはない筈だ。木谷氏の心事を忖度するを許さるゝならば、「人才拔擢」といひ「門戸開放」といふのは、現在京都に蒲鉾屋を營んでゐる竹本錦太夫の輩を、文樂座は歡迎すべしといふのであらう。これが木谷氏の具體案、木谷氏のいふ處を皮を剝いて申すと、かうなるのであらう。が、今の文樂座はいかにその藝が陵遲してゐるとはいへども、さうはまゐるまい。古川に水の絕えぬといふ諺が眞實を語つてゐる文樂座では、錦太夫輩の藝は掃いて捨てるほどあらうし、又あの邪道に陷つた錦太夫は、野に殘されたる遺賢では斷じてない。

二、「近松物の復活」といふ木谷氏の說は、何故「近松物」と限つて復活を唱道してゐるかゞ會得しかねる。近松のみが淨るりの「氏神」だらうか。これが既に間違ひの根本だと私はいひたい。復活すべ

き淨るりが、近松に多いのは肯定しよう。それは近松が多作の作家であつたからだ。寶暦以前の廢れた名曲を復活、上場しようといふ一案には、私も贊成であり、二三の腹案もあるが、「近松物の復活」といふ局限されたる一案は首肯出來ない。尙この項目について一考を要すべき事は、義太夫節の完成は竹本政太夫であると木谷氏もいつてゐる。私もこの說は肯定するが、只無條件で政太夫――卽ち二代目竹本義太夫が義太夫節を完成したといへるだらうか。淨るり史はさうは語つてゐない。初代義太夫は義太夫節の創始者であらうが、これを大成し今日の義太夫とならしめたは、義太夫の高弟竹本賴母、豐竹若太夫及び若太夫の流れを多分に汲んだ政太夫と、この三人努力の結果であらう。故に政太夫が大成者とはいへるが、政太夫の淨るりの據つて來る處は、初代義太夫のそれよりも、若太夫卽ち豐竹派の影響がヨリ大である。この若太夫卽ち豐竹派――東風の淨るりが今日の淨るりの根柢をなしてゐるものである。本來ならば竹本派の「西風」が基礎をなさねばならぬ今日の義太夫節が「東風」によつて大成されてゐる事も、一考を要すると共に、復活に考慮すべきは近松の作品に止まらぬ。東風の作者である紀海音その他、人形淨るりとしての作品中の價値あるものゝ穿鑿が、目下の急務である。豈に啻に「近松物」のみならんや。

以上述べた處は、木谷氏の第二項から第五項までに對する私の考へであるが、實はこれは末梢の事である。それよりも木谷氏とは全然反對の意見を茲に私は表明せねばならぬのは、

一、新作物の上演

である。淨るりに新作物の上演を可能とする木谷氏の説は、人形淨るりを廢滅せしむる一つの企てゞある。木谷氏は「新作といへば『乃木將軍』の類を聯想するのは困る」といつてゐる。この「乃木將軍」は近松座が試みた愚かなる企ての一つであつたらうが、こは實は「時代」と申すより、その時の「際物」といふ意味の變態的の興行的見世物淨るり、一つの愛嬌に過ぎないから、まだ罪が淺い。この例は「乃木將軍」に止まらぬ。その以前に、例へば明治三十七年三月十日初日の文樂座で、「伊賀越」を出した時に新關の段が引抜となつて戰爭當込みの新作がある。玉助がロシヤニーゲル氏、紋十郎がクーレクサ孃、兵三郎がワリヤアク艦長、玉龜がマーレッ艦長などいふ役割を勤めてゐる。次に同年四月二十日初日の「妹脊門松」の生玉の段、これが引抜となつて、戰爭新作淨るりが出てゐる。これらの新作と「乃木將軍」とはさしたる相違もない御愛嬌だが、罪の深いのは木谷氏の唱道するが如き「新作物の上演」である。木谷氏の説を採用したのか否かは知らぬが、大阪の松竹が本年四月の辨天座における文樂座において「付物」として豐竹古靱太夫に「お染半九郎鳥邊山心中」を語らしめようとしてゐた。これが左團次所演岡

本綺堂氏作の「鳥邊山心中」を淨るりにした新作である。古靱太夫が承知すれば、早急の作と早急の節付で上演する松竹の肚であつたらしいが、幸ひにして淨るりの道未だ衰へず、實現には至らなかつた。

――お染半九郎の淨るりは安永五年菅專助の作で、北堀江の芝居で上演された「鰤屋貞柳歳旦閻」はあるが、古靱に當がつたのは勿論それではなかつた。――木谷氏は、淨るりと姉妹藝術の歌舞伎に新作可能なるが故に、淨るりにも新作が可能であると、この大問題を、大膽に事もなげに解決してゐるが、以ての外である。又木谷氏は新作可能を、「淨るり史に見るがよい」と、木谷氏は獨斷を以て斷じ去つてゐるが、四百五十年の人形淨るり史を徵して、無條件に「淨るり史」が木谷氏のいふが如く、都合よくは敎へてはゐない。私は淨るり史を見て、却つて木谷氏の說くところと、反對の事實を敎へられるのである。

木谷氏のいふ淨るり史は、義太夫が生るゝ最初の――初期の淨るり史を指していつてゐるのみで、四百五十年の全淨るり史を通じて見ると、歷史の敎ふるところは、木谷氏の反對の事實であることを忘れてはならぬ。古淨るりが行詰つて、井上播磨、宇治加賀掾あたりの節を轉機として、竹本義太夫が義太夫節を創始した當時の歷史は木谷氏の說の如くであるが、爾來政太夫が義太夫節大成以來、まづ寶曆を限つて新作らしい新作が出ないといつてもいゝ、舊作の手入れはあつたらうが淨るりの創作は寶曆を限り

として終焉と見ていゝ、安永――これから起算して約百六七十年の人形淨るりは、先人の殘した作品の一部或は一節の改作か、節なり三味線の手なりの時代適應、集大成を目標として進んでゐる。これがほんとの「人形淨るり史」であつて、木谷氏のいふ淨るり史は木谷氏が自家の說を都合よく證據立てようとする「木谷氏獨斷の氏手製の淨るり史」と見ねばならぬ。世間には適用しない贋札だ。ほんとの淨るり史は木谷氏の說を裏書しないのである。

これは何故であるか。申すまでもない「人形淨るり」は寶曆の昔に旣に大成した、完成した藝術である。もつと大きなに負けて見ても寬政度を限りとして完成した藝術だ。その證據に、松屋淸七の如き人が出ても、二代豐澤團平の如き不出生の大天才が現はれても、決して新作には寄與するところは無かつた。僅かに時代の推移に伴ふ趣味好尙の變遷に、淨るりを變革したにすぎぬ。

斯の如く完成された古典藝術を、今日において新作を可能とすることは、私らからいはすれば痴人の夢だ。人形淨るりはそのまゝに保存すべきものだ。保存するについての案はいろ〳〵とあるが、新作上演は完成品を破壞するものである事を强調する。奈良正倉院の古代裂を、このまゝではをしいといつて龍村平藏氏の手によつて補織しようといふ愚舉と同じだ。補つた新作は、一つのイミテーションに過ぎない。龍村氏の造詣と手腕とを以てして尙且つ然りだ。人形淨るりは歌舞伎姉妹藝術だと多くの人にい

はれてゐる、その發達の歴史において、さうであつたことは事實であるが、今日では本質的に歌舞伎と姉妹藝術といふよりも保存上の見地からして、能樂と同一の取扱ひを受くべきものであると私は思ふ。

又木谷氏は、今日の文樂座が二十ばかりの同じ外題をのみ繰返へしてゐると非難してゐるが、この點に心づくならば、その方法の不當なる所以を極めねばならぬ。これは今日の文樂座經營者の松竹といふ營利一點張の營利會社が、事茲に至らしめたのである。この事については口を酸くし筆を禿していつも私は松竹が人形淨るりを亡ぼしつゝある事を論じ來た。別項の人形芝居の概論を述ぶるに當り、その都度松竹の誤れる文樂座に對する經營を、無遠慮に記述してあるから、爰では述べないが、木谷氏は「今日に及んでなほかつ古典藝術の博物館としての文樂を保持することは事實において空論に屬せすば幸ひである」と述べてゐるが、私は——

今日新作を以て完成したる人形淨るりを破壞し、その變質したる「人形淨るり」を展開と稱するならば、今日の人形淨るりは寧ろ玉碎するに如かず。

といひたい。私のいふのは、古典人形淨るりをいふのであつて、「變質したる人形淨るり」は、私は茲では問題にしてゐないことを更に斷つておく。木谷氏が新文樂座への注文といはすして、變質したる人形淨るりの、展開を欲するとならば御意のまゝだ——ちよんがれ節なりと浪花節の姉妹藝術なりと御意

のまゝだ。

最後に一言申したいことは、木谷氏の新文樂座へのいろ〳〵の注文が、床の太夫三味線に限つてゐるが如き觀がある。私は人形淨るりの歴史を按ずるに、斯道の衰運にあるときは、常に人形が主となつて淨るりの天才の輩出をまつたものだ。私は、今日の「人形淨るり」の現狀に徵して、保存の重點を「人形」において講ぜらるべきものだと思つてゐる。これらに對する私の私案は、外の機會に述べてみたいと思ふ。

終りに木谷氏の「近松論」の一部に觸れて一言したい。——

それは、嘗て、浪速叢書刊行會の關係者を中心としたる一會に「散木會」といふがある。この散木會の席上で、木谷蓬吟氏が近松門左衞門の持つ思想的の特長として、「平民的であること」「强い人間愛を持つたこと」「皇室中心主義者であつたこと」等を說いた。その他の近松の思想的傾向はまづ肯定するとして、近松を「皇室中心主義者」であつたと斷ずる木谷氏の所論に、私は服さないものである。木谷氏は、散木會の夜近松を「皇室中心主義者」と認むる證據として擧げたところを聽くと、

一、近松の時代物は大抵書出しに、戯曲が取扱ふ年號と何代の何々天皇と明記してゐるのは、禁廷を

人心に深く彫りつくる一手段であつたこと。卽ち禁延の存在を知らしめたのである。そしてこの開卷の序曲を太夫が語る間、人形は等しく面を伏せて、敬虔の意を致したのが古例である。

二、脚色に畏いが親王が、民間に漂泊された時に、卑しい民家の娘との情事を多く脚色したのは、皇室と民衆とを握手せしめた近松の意志で、德川政府を除けものにしてゐる點が見える。

三、近松の畫像の賛にある例の「代々甲冑の家に生れながら云々……今はの際にいふべくおもふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑云々」とある。この「一大事」といふのが王政復古の一大事である。

と、木谷氏は說明した。これに對して私は實に噴飯に堪へない。腹の筋をよらし、臍が茶を沸かしたのであるが、これらを聽く誰もが謹聽してゐるのと、當日の司會者の江崎政忠氏の如きは、近松の贈位申請の好箇の材料だとまでいつてゐられた。大阪府立圖書館長今井貫一氏は流石に「文藝の士である近松の贈位申請は文藝家としてゞなくばいかぬ」とやんはりと近松の皇室中心主義說を否定してゐられたが駁するまでもない木谷氏の近松論は愚論だが、筆の序で一刷け申述べておくと、

一、年號天皇名を記したのが思想的に皇室中心主義の證據だとすると、昔の金平本の作者は皆皇室中心主義者だ。金平本の作者岡清兵衞が皇室中心主義を奉じてゐたことになる。近松以外の少しは古

淨るりをも顧みられよと木谷氏に申勸める。人形の面を伏せてゐることは、人形芝居以外に「操三番叟」などに見る。これ皆序曲には人形に魂がなく、本文に入つて呼びかけられて、人形に魂が入つたことを表象してゐる。これを皇室に對する敬虔の念からだとは何として思へようか。木谷氏の頭を私は疑ふものだ。

二、皇室人民との握手も、いりほがの説で古淨るり――近松以前の作者も皆この理由で皇室中心主義を奉じてゐたことになる。

三、の贊中の「一大事」を王政復古と讀まうとする木谷蓬吟氏は、森鷗外博士が嘗て「めさまし草」の「雲中語」か何かでいつた如く、軟體動物に骨を探し求め胎内の一本のトゲを獲て喜ぶ手合だ。「埃餘小錄」その他、「羈旅漫錄」いろ〳〵なものに異なつた文章が出てゐる。その何れにしろ近松のこの辭世の各種の文句を、讀者はよくその文勢を一讀されて、軟體動物に骨を求むる木谷氏の態度を共に嗤はうと思ふ。（昭和四年七月十四日大朝を見て直ぐ認む）